
とあるトウキョウ事変

憂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるトウキョウ事変

【Nコード】

N8890L

【作者名】

憂

【あらすじ】

東京都内で店を構える三神を中心に時は流れて行く。「お前死にたくないか？」それは人間では無い男の問い掛け。「それとも何、あんたは人間じゃないとか？」それは人間を超越した女の疑問。「これ以上僕に関わらないでください。でないと、死にますよ？」それは現実を否定した少年の嘆き。「幸せになるには何をすれば良い？ 答えは簡単。幸せな人間から奪っちゃえばいいんだよ」それは現実に依存し過ぎた少女の笑み。

人間じゃない人間と、人間っぽくない人間達の物語。

始まりは問うことから。

「お前 死ぬよ？」

我ながら格好のつけた台詞だと思いつつも、三神はその言葉を多様するのを止めない。

ビルの屋上だ。高度が高い所為か、嵐のような暴風が吹き荒れるビルの屋上で、女は男に追い詰められる形で向かい合っていた。

「！！」

女が何かを叫ぶ。だが嵐のような暴風の中、少し距離の開いた人間に聞こえるように叫ぶのは容易では無い。三神が先ほどに呟いた言葉も、女には届いている筈が無かった。

仕方無く三神は、女との距離を縮めようと気怠そうに歩を進めた。

三神は先ず、向かい合って何かを叫んでいる女のことを知らない。何故このような状況に見舞われているのかも三神には到底理解し難いことだ。むしろ理解する気も無いのだが。

しかしこれは、何も三神と無関係に起きた出来事では無かった。色々なところを端折って説明すると、結論を言えば三神は普通の人間とは違う生き物だ。無論人間の形をしている以上、何もしなければ正体がバレることは無い。

唯一正体がバレるとしたら 三神の手に因って女が葬られた時だけだ。

女との距離が後三步程度まで近付き、その時になって初めて女の顔を見た。三神は目が悪い。漸く霞みが晴れてきた奥に現れたのは、まだ高校生ぐらいの美麗なる女の姿だった。

これはまた、随分とお若いようで。

淡く薄い栗色の髪が肩の下で生き物のようにうねる。右に流した前髪の奥には大きなアーモンド状の瞳、鼻はとても小さく、唇は程良く膨らんだ小さな口を形作る。

人間ならその容姿に誰もが目を惹かれ、意識を囚われるだろう。膝より上の短いスカートに、黄色っぽいシャツと灰色のベストを重ね着た女は、不適に笑った。

「何の恨みがあつて私に付きまとうのかは知らないけど、これ以上は止めておきなさい」

ノイズ混じりの言葉を三神は辛うじて聞き取った。女はやけに自信がありそうな、悪く言えば虚勢を張ったような態度で鼻を鳴らす。

「何故だ」

「私の知り合いに暴走族の総長がいてね、私の為なら飛んでだって来てくれるんだから」

やれやれ、と三神は情けなく溜め息を吐き、もう何度似たような台詞を耳にしただろうかと、男は無意味に回数を数えてみる。七回。

虚勢や上辺だけの台詞はもう聞き飽きた。

先刻にも言った通り、三神は普通の人間では無い。仮にもし三神が”普通の人間”だったならば女の虚勢は多少なりの脅しになっただろう。だが三神は、普通とか異常とかそういう以前に人間では無いのだ。

それに、このような形で追い詰めている以上、女を取り逃がすなんてへまは三神ならしない。結論を言えば三神はむかっていた。

要は、女が幾らこの場を張り詰めた状態にしたところで暴走族の頭は刹那的に登場する訳が無いので、怪しい動きを見せた段階で三神が少し女の肩を押すだけで話は終結する。

けれどそれを行ってしまうと、三神が殺したことになる。それは三神にとってかなり好ましく無いことだ。幾ら三神の中で重大な事情があれど、自らの手を汚すつもりなど毛頭更々無かった。

結論を言えば、三神はこうしたのだ。

「お前 死にたくないか？」

問い掛ける。唯それだけ。

自己紹介って大切だろ？

三神の仕事は少々特異だ。「いらつしゃいませ」と、呟いたところから男の就労は始まる。

この仕事を始めてから、三神は数十人も人間を殺めてきた。とはいっても自ら手を下した人間は一人もない。皆、三神との遣り取りの末に滅ぶことを選ぶのだ。

東京都内に構える店には、鉄のような鼻をつんと刺激する香りが漂っている。事実を言えばそれは建物の匂いでも店の匂いでも無く、三神の匂いだ。仕事柄三神はそういうことになることが多々あるのだ、仕方無いと言えば仕方無いのだが。

本日は晴天。天気予報でそう告げられた三神は傘を持たずに春の東京を彷徨っていた。天気予報は見事的中して、ある意味傘が必要なほど日差しがコンクリートの地面を熱している。

三神は一年の大半を暇で暇を潰したくなるぐらい暇を持て余す。その為、三神は様々な移動手段を使用しながら東京都内を散策することがもはや趣味と化していた。

今日暑いから、アイスが良く売れそうだ。

とか、コンビニの店員でも何でも無いくせしてそんな他愛の無いことを考えることに時間を費やしたり。

まだ五月の上旬だというのに、既に八月ぐらいなんじゃね？ と思うような暑さの下、大して暑がりもせず退屈そうに大通りの脇を三神は歩く。

最近、黒いパーカー（またはフード）を着用した中高校生が増えてきた。街を歩けば至る所に生息していて、不快なことこの上無い。彼らは俗にブラックキルトと呼ばれ、悪事や暴行を繰り返す訳の分からぬ輩どもだ。

質の悪いことに、ブラックキルトの形成は未成年の高校生が主をなしている。警察の側には法律というものが当然ながら存在していて、そこに記された通りに行けば未成年の犯罪は軽罰で済まされてしまうので、幾ら取り締まると如何せん効果が無い。

人数が余りにも多過ぎことも、質の悪さに拍車を掛けている一つ原因だ。しかし、本当の問題はそこでは無かった。

ブラックキルトの核を成す人間こそが、最も厄介なのだ。

腕時計を見て、いつの間にか昼を回っていたことに気付く。そのことに気付くと、何故だか無性に空腹になり、三神は本意ながら目先の喫茶店に足を運んだ。

入口から対角線の一番奥の席に腰を落ち着け、メニューの表紙にあったからという理由でサンドイッチを注文した野上は、店内を見渡した。

五人だ。店内にも黒いフードを着用した未成年の一団が見受けられる。喫茶店を何処かのファストフード店と勘違いしているのか、

騒ぎ散らす連中に店員は明らかにうんざりしている。

だが連中を咎めようとする者は誰もいない。下手に正義感を見せ付けて連中に目をつけられたりでもしたら、この街で生きていくことは絶望的だ。

これは噂なのだが、東京内の学生はほぼブラックキルトに所属しているとか。飽くまでも噂なので鵜呑みには出来ないが、それでも十分な脅威なの言うまでもないだろう。

と、注文していたサンドイッチが珈琲と共にテーブルに到着した。喫茶店独特の落ち着ける雰囲気を感じることが（連中の所為で）出来ずに、三神は苛立つ。

どのような内容で俺の気分を害しているんだ？ と、普段なら入れないはずのミルクを入れた珈琲を片手に連中の話に耳を傾けてみた。

『そっぴゃお前らリーダーの名前って知ってつか？』

『うんにゃ、知らねえけど』

『俺も知らねー』

『俺も俺も』

『やっぱりお前も知らないのか。噂じゃありリーダーは女だって聞くけど、まさかそんなことはあるわけねえよな？』

『俺に聞かれても知るかよ』

『てかリーダーの名前も知らねえのにキルトのメンバーだなんて可笑しな話だよな』

『集会だつて一度も開かれたこと無いんだし、当然っちゃ当然じゃん?』

『いや、それにしたつてリーダーの名前ぐらい知つとかねえと何かすつきりしないだろ』

『とか言つといていざリーダーの名前が明かされると、誰かの下に付いてるみたいでむかつく、とか言い出すんだろ、どーせ』

『う……まあそうだけど』

なんて他愛も無い話のようだった。

しかし、三神には関係の無いような内容なのだが、頭の名前を知らないというのはどういうことなのだろうか。

ブラックキルトが単なる名ばかりの集団で無いのは、三神でも知っている。それどころか、ブラックキルトの頭の名前は、第三者全く無関係な三神でも知っていた。

ブラックキルトはここ最近急激に有名になった集団だ。もしかしたらそれが隅々まで見渡せていない原因なのかも知れない。

ついさつきまで興味を惹かれた話題から数分で意識を逸らし、良い感じに狐色の付いたサンドイッチを口に頬張った。コンビニなどで売られている物とは違い、見た目もさることながら味もまた格別

だ。

連中が騒いでいることも忘れ、最後の一口を平らげようとしたその時だった。

「てめえ、喧嘩売ってんのか！」

ばこんっ！ と怒号と同時に金属が破裂するような音がして、三神はそちらを向く。そこには、五人の男と対峙して、床に固定されているはずのテーブルを宙に蹴り飛ばした後の格好をした”女”がいた。

真っ直ぐに伸びた右足を地に着けると、後ろで一括りにしたポニーテールが毛先を整えて腰下辺りに集結した。つり上がった目が彼女を攻撃的に見せ、彼女のラフな服装がより一層それを際立たせる。

端から見ていれば、その女が徒者で無いことは一目で分かる。だが、連中は馬鹿なのか、それともテーブルの柱が金属で出来ていたことを知らなかったのか、臆すること無く女を睨みつけていた。

「てめえこそ俺らがブラックキルトだって知ってて喧嘩売ってんのか！？」

その中の一人が黒いフードを見せ付けるように顔を押し出して言った。

「ああ知ってるよ。てめえらがブラックキルトってことと、ブラックキルトがクズみてえな集まりだってことをよおー！」

「んだとーらあー！」

口の端を嫌みつたらしく歪ませて女が言う。それが頭にきたらしく、連中の一人が飛び出したの皮切りに四人全員が女に殴りかかった。

初めに飛び出した鼻ピアスの男が、女の顔目掛けて拳を突き出す。女はそれを受け流すと、そのままの勢いで鼻ピアスの男の鳩尾に拳を叩き込んだ。めきめき、という不快な音を響かせて鼻ピアスの男はダウンした。

休む暇なく残りの四人が攻め立てる　　が、一瞬だった。

三神が瞬きして次に目を開いたときには、四人の男が既に宙を舞っていた。先刻のテーブルの如く地に叩きつけられる四人の中心で立ち尽くす女の姿は、まさに圧倒的だった。助けに行こうかと悩んでいたが、行動に移さなくて幸いだったと三神は安堵した。

意識を失って横たわるブラックキルトを無視して、女は何故か三神の方に歩いて来て、三神の一つ隣の席に座った。女は顔色一つ変えずに店員を呼び、注文を終える。注文を取っていた男が恐怖の余り震えていたのは何も可笑しいことでは無い。

三神は手に摘んでいたサンドイッチを口に入れたが、如何せんあの出来事の後だ、味も感じられぬままに飲み込む。すると女が、三神の方を見て言った。

「あなた、私を助けようとしてくれてただろう」
なるほど、そういうことか。

「気付いていないとでも思ったかい？」

笑いを噛み殺すように体をくの字に曲げたが、結局堪えきれずに女は吹き出した。だが、三神が同じようにして笑い出すことは出来なかった。

あの状況で、入口から一番遠い俺を見ていた？

別のことに思考を捉われ、今の三神には女の笑い声すらも聞こえない。未だ横たわる少年らを片付ける店員のその奥、手動のドア。

幾ら小さな喫茶店だからといって、その距離から三神の動きを把握することは至難の技だ。ましてや、三神が助けようかと悩んで動いたのはほんの数センチにも満たない。

三神は思わず生唾を呑んだ。

「あ、ごめんごめん。緊張なんかしないでいいよ。あんたに暴力を振るう気なんて微塵もないからさ」

今の言葉だって、雰囲気ですった台詞なのか三神が唾を呑み込んだことで気付いたのか分からない。が、もし後者であるならばこれ以上に危険なことは無い。

三神は人間では無いが、感情や思考、大体の部分が人間と同じように出来ている。猛獣を見て怖いと思うこともあれば兎を見て可愛いと思うこともある、一つの問題が難しくて悩んだりすることも日常的に行われている。

転けて擦りむけばヒリヒリと痛むし、心臓を貫かれれば呆気なく

逝く。だから、怪我をすれば病院にも行くし、悩みがあれば誰かに相談したりもする。

そういうところを見れば、三神は普通に人間だ。だが彼女は彼女は果たして、”普通”の人間だと言えるだろうか。

五人の不良を瞬殺。金属製のテーブルを破壊し、怪我一つ無い。そして常人離れし過ぎた情報処理能力。

三神なんかより、むしろ彼女のような人間こそが、怪異では無いか。

「そんなに怖がらないでよ。あたしはただの人間、あんただってそうじゃん」

見透かされているようで、怖い。

「それとも何、あんたは人間じゃない　とか？」

見透かされるのが、怖い？

べらべらと一方的に会話を進めていく女の言葉は遮り、三神は逃げる。

「俺の名前は三神恋。年は二十で好きな物は好きと思う物だ。君は？」

自己紹介って大切だろ？　と明らかに話の流れに沿わない切り出し方だったが、この際三神はどうでも良かった。話の流れがどうであれ、彼女から主導権を奪わなければ。

「あ、あたしは沢城志乃、十八の女子高生だけど、それにしてもいきなり過ぎやしないかい？」

「そうか？ 言葉を交わすものなら自己紹介は必須だと俺は思うんだが」

「はっはーん。見た目以上に律儀な人間なんだね、あんた」

怪訝そうな顔で答えはくれた物の、目を狐の如く細める様はやはり見透かされているようで気分が悪い。

「それでもないさ。それで俺は君のことをなんと呼べばいい？」

「あたしのことは何だっかっていいから、私はあんたのことを恋って呼ばせてもらおうよ」

「じゃあ……俺は志乃と呼ばせてもらおうが、構わないか？」

「全然構わないさ」

沢城、志乃？

短く頷く志乃の横で、三神は彼女の名前をもう一度繰り返した。名前が変とか、綺麗だとか言いつもりでは無く、ただその名前に三神は聞き覚えがあった。

が、今はそれどころでは無い、と三神は思考を中断して会話を再開する。

「自己紹介が済んだところで、一つ聞きたいことがあるんだが」

「なんだい？ あたしに答えられる範囲なら何でも答えてあげるよ」

「それはありがたい。じゃあ単刀直入に言わせてもらおう」

話の主導権を奪うには　これくらいの核心を突かなければ。

「ブラックキルトについて、君はどう考えているんだ？」

瞬間、志乃の体が不自然にびくついた。

「あんた……初対面なのに遠慮も糞も無さすぎるよ」

「それはお互い様だと思うんだが」

「くっくっく……こりゃああんたの思惑通りになってるみたいだね」

「さあ、どうかな」

思わず三神の口元が緩む。主導権が移った　だが、そんなことよりも三神は、自分よりもよっぽど怪異だと思っていた人間の、人間らしい一面が見れたことに喜びを隠せないでいた。

趣味の悪い話、三神は人を困らせることが大好きだ。それは小学生の軽いイジメから始まり、中学高校と今に至るまで、変わる事が無かった。

人を困らせることで得られる快感は三神にとって唯一無二のエリクシル。あまつさえ、それが三神を怪異へ誘う最大の”餌”になっ

ていたことにも気付かずに。

「いいよ、私が言ったんだ。答えられる範囲でなら答えてあげるとね」

ここに来て漸く、主導権が移ったことに三神はほっと胸を撫で下ろした。志乃も落ち着きを取り戻したらしく、温和な表情で両手を上げた。

「あたしはブラックキルトのリーダーが大嫌いなのです。ただ、それだけのこと。それ以上でもそれ以下でも無くね」

「……本当にそれだけなのか？」

そのときの面影が妙に胸に突っかかり、三神は無意識に問い掛ける。少しの沈黙の後、志乃は表面上の笑顔は剥がれ落ち、沈鬱な顔が露わになった。

「まったく、あんたって絶対に友達とかいないだろう……」

それはお互い様だろ。

喉元まで出掛かった言葉を、話を途切れさせない為に三神は敢えて返事をする事止めた。

志乃は節を屈して悪態混じりの溜め息を垂れ流す。

「初対面の人間になんて話をしようとしてるんだろっね、あたしったら。話の主導権を易々と手放しちまったのが失敗だったかね」

かあーっと、とても十八の女子高生には似つかない惜しみ方で手の元を額に付ける志乃。

全く、生まれつきの性分とは恐ろしいものだ、三神はつくづく思う。

「仕方ない、話してあげるよ」

と、いよいよ決意した志乃は知らぬ間に届いていた珈琲を口に含み、一気に飲み干した。

「あれはね、確か　あたしが高校に入学した頃だったかな、あたしの妹が中学の三年生だったのは。妹は健気な奴でね、頭が悪いあたしと同じ学校に通いたいと言いだしたんだよ」

「……………」

「それだけなら良かったんだよ。あたしが頑張れば妹を別の高校に進学させることも出来たから。その頃からだったかな、あの集団　ブラックキルトが街に現れ始めたのは」

三神は凜として咲き誇る花のように、志乃の話に耳を傾ける。

「あたしの腕っ節ならさつき見たから知ってるだろ？　あたしは生まれたときからこんな感じだったんだ。何て言うんだろうね、例えるならば、見えている世界が人とは違う」

「故にその力を欲された」

「そう。けれどあたしに敵う奴なんている筈も無かった。あたしに

敵わないと理解した瞬間、奴らはあたしの妹に狙いを付けたんだ。とんだクズ共だと罵倒した。そしてあたしは妹を助けるが為に奴らのアジトに突撃した。核部に到達するのは容易かったね、雑魚が何人いようと所詮雑魚は雑魚でしか無いんだ。けど、そこにいたあたしの妹は何て言ったと思う？」

三神の中ではその話の結末が予想出来ていた。多分三神が普通の人間だったとしても同じだっただろう。だが三神は、何も言わずに顔を俯せた志乃が口を開くのを、ただ待った。

「お姉ちゃんに用は無いの、だからもう帰って　　って」

次の志乃が顔を上げたときは、涙腺が崩壊した後だった。

「それを聞いた瞬間、あたし支えていた唯一の太っとい柱が崩れていったよ。だからあたしは奴らを許さない。いや、許せるわけがない」

正直な話、彼女の話は物凄くつまらなかった。三神はそういう不幸な類を作り出すことを生き甲斐とし、生きる為の仕事にしてきたからだ。だから、目の前で涙を流す彼女の心理など手に取るように分かる。

だからこそ、実際にそれを目の当たりにした彼女の絶望が、如何に耐え難い物だったのかが自分のことのように分かるのだ。

あれだけの力を持っている彼女が、人目を憚ること無く涙を流した。それは、幾ら平然を装おうが、幾ら人間離れした力があるうとも、彼女もやはり人間なのだという証明。

「ブラックキルトとという存在を、認めてはいけないんだ……!!」

志乃は確かに強い。肉体的にも精神的にも。だが、生きていく糧を失った瞬間から彼女の中の強さは無意味な産物と化した。

その力はまさに両刃の剣。そもそもこのような災厄の身に産まれなかったら、先の辛い出来事も起こりうる筈が無かったのだから。

話が終わったところで、三神の中に志乃の声以外の音が戻ってきた。どうやらつまらないと思った話でも、いつの間にか聞き込んでしまっていたようだ。彼女の話にはそれだけの想いがあっただろう。

志乃の話は時間にして数分だった。時計の長針の見て、感覚というのは案外に信じ難いものだと思三神は嘆く。

「いや、申し訳無かった」

そして頭を下げた。

「なんだい急に、あんたが話せって言ったんじゃないかい」

「それはそうだが、幾ら俺に遠慮が無かったとはいえ、少しは自重すべきだった」

本当に悪かった。と三神は再度頭を下げる。

そんな様子に、まるで自分を嘲笑うような溜め息を吐き志乃は言った。

「いいんだよ、頭を上げな。本当に嫌だったなら最初から断ること

だって出来たんだよ。それをしなかったのは、きつと誰かにこのことを話したかったからで、あたしは心の何処かで救いを求めたんだと思う。だから、むしろ感謝してる」

「ありがとう」と志乃は言葉を切った。

揚々たる様で彼女のことを少しでも怪異だと思った自分が、三神は恥ずかしくて志乃の目を見られなかった。宙に彷徨った視線の先に映る珈琲が、自分の情けなさを語っているようで腹が立つ。

と、くすりつ、という耳をくすぐるような柔らかな笑みが何処からか響いた。その先を追うと、涙を流しながら不完全に笑う志乃と目が合う。

「あたしさつき、あんたに友達が少ないだろって言ったけど、完全に勘違いだったみたいだね」

「どつという意味だ？」

「そのままの意味だよ。それじゃああたしはそろそろ学校に行かないといけないから、ここいらでお暇させて頂くよ」

そう言って三神の質問にはっきりと答えぬままに志乃は席を立って行った。

後のこと。自宅（兼、店）に着いて一通りの仕事の整理を済ませた後、三神は昼の出来事について思い出していた。

沢城志乃という、一人の”人間”のことを、だ。

あの力は生まれつき　　だったと彼女は言っていた。何らかの遺伝ミスによる副産物なのだろうが、それにしても気になることが多い。すぎる。

ブラックキルトとのこともそうだ。彼女は奴らのことを嫌っていた。理由が理由なので仕方無いのかも知れないが、どうにも可笑しい。

何が可笑しい　　ってそれは、妹の言動に決まっている。彼女の妹は奴らに染められるような人間だったのだろうか。志乃の話を聞く限り、姉想いの何処にでもいそうな人間にしか思えないのだが。

第一、ブラックキルトの目的とは一体何なのだろうか。志乃の力を欲するということは、何らかの武力を行使するつもりがあるのだろうか、分からない。三神は考えるが、得てしてそれらしい仮定論も見つからない。

こうなると段々苛々してくるのが三神の性分だから困る。何かに悩み過ぎたり問題が解決しない状況が続くと、徐々に腹が立つてくるのだ。

しかもこの性分、自分に納得出来ないことにも影響を及ぼすから尚悪い。見方を変えればただの短気なだけに思っかも知れないが、三神の中では違うらしい。

と、考えが逸れてしまっていたことに気付き、三神は首を振った。彼女のことを知るにはまだ情報が足りなさ過ぎる。今分かっていることだけでは全てが仮定に終わってしまう。

「ん？」

不意に携帯が鳴った。

携帯を開いて画面に目をやると、そこには久しく会っていない友人からのメールが届いていた。

懐かしいなと思いつつ受信メールを開封する。久闊を叙する内容から始まって、近況の笑い話を交えた空白の後、どうやらそこがらが本題のようだ。

「何々……」

解決しない疑問にいいよ嫌気がさしてきた三神は、ここぞとばかりにメールに集中する。メールの内容はかなり衝撃的だった。

新宿西区のとある廃ビルに、何やら人集りが出来ているようだった。好奇心旺盛な鳴神真也は、興味に惹かれるがままにその人集り

の中へと分け入って行く。

黒い、フード？

人集りを掻き分けて、ずんずんと奥に進んで行くと、徐々に黒いフードを被った連中が増えてきた。白いシャツにジーンズという手抜き具合の鳴神は明らかに浮いている。

そう思っただけに意識を巡らすと、鳴神を見る人間が幾人かいた。しかしそんなことを気にするような鳴神では無い。それどころか注目されること望むような人間なので、それらをオーディエンス程度に考えるぐらいだ。

鳴神は深く息吸って目を瞑った。

なるほど。これが最近噂になっているブラックキルトという輩か。今日は集会らしいな。

鳴神の信条は第三者の気持ちになって物事を見ることだ。いや、信条というか何というか、それが鳴神の”力”なのである。

鳴神にその力が宿ったのはかなり早い時期だった。まだ小学校に通っていた頃に彼は一度だけイジメられたことがあった。在り来たりで今になって考えれば退屈で、どうしてあんなことでイジメに発展したのだろうかと疑念を抱けるほどだが。

とまあ事実、イジメられたこと自体はどうでも良いのだ。問題はそれをきっかけにある人物と出会ってしまったことだ。

当時その人物と出会ったとき、鳴神は疑いを知らない純粹無垢な

少年なのに対しその人物は正直言えば性根が腐っていたと思う。悪逆無道。まさにその一言に尽きる最低さだった。

理由は分からないが、鳴神はそいつに凄く好かれている。何でも、適度に困ってくれるからだ。

成人した今でもそいつとの関わりは消えていない。が、今でも分からないことだらけだったりして、それと同時に誰も知らないそいつ秘密を知る唯一の人間だったりする。

そして鳴神は、今ここにその力を軽く行使した。鳴神の視点は全く異なる観点に移動して、集団の中心で優雅に咲き誇る一輪花に向けられる。

花は穏やかに揺れた。

「貴方達は 駒です」

一輪花の正体は、毒を持つ美しいスズランだった。

妖美なスズランを取り囲むのは色の無いパンジーといったところであろうか。

「私はプレイヤー。貴方達は駒。それ以上でも無ければそれ以下でも無い。良いかしら？」

艶のある真っ黒な髪は地面に散らばり、ソファアに腰を落ち着ける女の姿は女帝を思わせる。眼鏡の奥に潜む漆黒の瞳に感情は無い。

それまで騒がしかった喧騒も女の一声で時が止まったかのように

制止した。集団は並びこそばらばらなれど、立つ姿勢も同じであれば、呼吸のタイミングまで等しかった。

ただ一人、鳴神の器だけを除いて。

女の次の一声を待ち、息を飲む。暫しの沈黙にも動じない彼らの中から、一つの人影が飛び出した。

ナイフを振りかざした男が女に辿り着くまで、五秒。その男が倒れるまで、残り二秒

からんっ、と独りでに男の躯が地に顔を伏せた。予備動作など無かった。女はただの一度もナイフを振りかざした男のことを視界に捉えることはせず、じーっと集団の中の一部を眺めていただけだ。

「もう一度言います。貴方達は駒です」

女は繰り返す。今の一度で鳴神は理解した。

あれが奴の力か。

鳴神が行使している力と同じだろう。人間のくせに人間を超えた力を持つ選ばれた存在が、あの女なのだ。

力に名前は無い。宿るタイミングだって不揃いだし、第一、力の目覚める原因もきっかけも謎だ。故にそれは神に与えられし力だと、低俗な奴らはそう考える。

だが彼らは違う。女や鳴神はその力の本質を理解し、行使するこ
とが出来るのだ。

故に鳴神は自らの力に名を与えた。自己に捉われぬように、己と力との境界線を鮮明に決定した。移鏡と。うつしかがみ

「貴方達はそれを肯定した上で、私について来てくれるのかしら？」

弱気な台詞を、いとも優雅に唄った。此処にはそれを否定する存在は無いようだ。駒達は呼吸音すらも途絶えさせて女の瞳に吸い込まれるように 飲み込まれた。

ただ一人、鳴神の本体を除いて。

「そう……ならば私について来なさい。そして変えるのよ。この腐りきった世界を」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8890/>

とあるトウキョウ事変

2010年10月14日15時29分発行